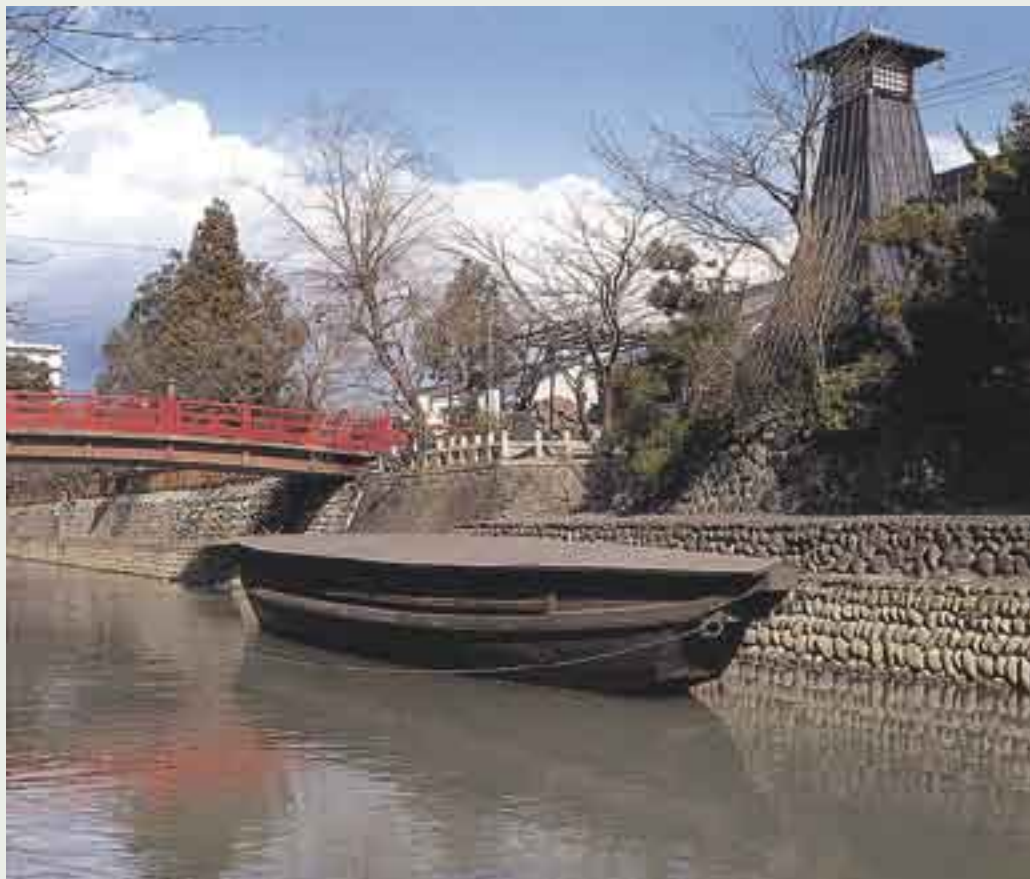


# 木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。  
今回は水の都・大垣市を特集。  
複合輸中である大垣輸中の歴史と現状、  
現在進行形の事業をクローズアップします。  
今回から六回に渡って明治改修を追跡します。



## INDEX .....

### ふるさとの街・探訪記《大垣市》

◆西濃の一大拠点として飛躍を遂げる大垣市

### AREA REPORT

◆水と緑のまちづくりを目指して

### 気ままにJOURNEY

◆美しき川の流れは、歳月を越えて悠々と。

### 歴史ドキュメント

◆官民熱望の末、三川分流を目指した明治改修、いよいよ始動。

### TALK&TALK

◆全財産をなげうち治山治水に尽くした金森吉次郎

### 民話の小箱

◆石引神社と大垣神社の長刀岩



# 西濃の一大拠点として飛躍を遂げる大垣市

遙かにしえの時代から、

水の都として、歴史と文化を育んだ街 大垣市。

揖斐川をはじめとした数多くの河川、

豊富に湧き出づる自噴水の恩恵を受けながらも、

それゆえに水と闘い、時代の波と闘いながら、

西濃地区の一大拠点として

独自の文化を育ててきました。

こうした伝統と文化を守りながらも、

新たな都市づくりを目指して、

多彩な事業が展開されています。

## 大垣市の概要と地形

西に伊吹山、西南に養老山地を配する大垣市は典型的な輪中地帯です。東は揖斐川、南は牧田川、西は相川によって囲まれ、杭瀬川、水門川、大谷川など十四の河川が低湿な市域を南流。これらの河川は



大垣市空撮

古来よりしばしば洪水をもちたため、人々は洪水から集落や耕地を守る必要

上、近世初期のころ、周囲に堤防を築造し、

大垣輪中、東中之江輪中、西中之江輪中、

禾ノ森輪中、など、すべてが大垣市に含ま

れる大きな複合輪中を形成しました。大垣

の地名が文献に登場するのは、鎌倉末期。

東大寺古文書には、「大柿」の名が記されて

いますが、古来より大垣と大柿が併用さ

れ、一説には洪水の難を防ぐため大堰堤を

築いたことから大垣と呼ばれたと伝えられ

ています。

また、古くから水都と呼ばれた自噴水

地帯、豊富な地下水に恵まれてきました。

各家庭には自噴水を利用した掘り抜き井

戸があり、冬には温かそうな湯煙がたちこ

め、夏には西瓜が冷やしてある、その風景

は、かつての大垣の風物詩でもありました。

このような自噴水地帯は大垣輪中から羽



輪中分布図

## 戸田市の治山治水事業

大垣城は天文四年(一五三五)、美濃守護土岐氏の家臣・宮川吉左衛門尉安定の築城と伝えられています。慶長五年(一六〇〇)、関ヶ原の戦いでは、西軍・石田三成の本拠地となりましたが、落城後、江戸幕府は石川松平、岡部など譜代大名を入城させ、大阪を牽制。寛永十二年(一六三五)より戸田氏が十萬石を封じ、以後幕末まで十二代、二三五

年続きました。初代氏鉄の転封は、軍事的手腕もさることながら、前領地尼崎時代の治水の功を認められていたため。西濃輪中地帯の開拓と治水の使命を帯びて入城したのでした。俸禄制の採用、新田の開発、農民の保護、治山治水事業など、氏鉄は藩統治に腕をふるい、その施政は長く藩政の基本となりました。中でも、治山治水を重視。治山としては、上流部にあたる根尾筋の藩林や多芸の藩林の乱伐を禁止し、植林を推進、山地における水源涵養を奨励しています。一方治水事業も積極的



大垣藩初代藩主 戸田氏鉄公



鶴森伏越樋工事絵図屏風(部分・林慶司画) 大垣市輪中館蔵

## 文教の町・大垣

初代藩主氏鉄をはじめ歴代の藩主は学問を好み、藩士にも奨励文化は大いに興隆

しました。天保九年(一八三八)には藩校も

設立され、東の岩村、西の大垣とうたわれる

ほど、数々の文化人を輩出しました。また、

大垣は俳聖松尾芭蕉が「奥の細道」を終え

た土地。美濃俳諧のリーダー谷木因が芭蕉

の俳友に当たることから、芭蕉の来遊は四

度及び、船町港跡には芭蕉・木因・如行ら

による「奥の細道むすびの地」送別連句碑が

建てられています。

蘭学案の

蒸気風呂



江馬 蘭齋

江戸後期には蘭学という新しい学問の波が押し寄せました。美濃蘭学の開祖は大垣藩医の江馬蘭齋。四六歳の蘭齋は藩士の許しを得て解体新書で名高い杉田玄白や前野良沢の教えを受けた後、大垣に戻って蘭学塾好蘭堂を開き、蘭方医としても活躍、多くの著書・

訳書を記すばかりではなく、蒸気風呂も考案するなど、九、二歳の生涯を学問に費やしました。蘭齋の長女・親しみ、頼山陽が文化十年(一八二三)に大垣へ来遊したおり門下生となり、詩文や苦道の指導を受けています。当時、男性中心であった漢詩の世界に慧星のごとく現れた細香は、繊細な感性と文章力で素晴らしい詩を残し、藩の教育文化にも貢献。藤江町の禅桂寺に父蘭齋と並んで葬られています。



江馬 細香

## 大垣市の誕生

明治二二年には大垣町制を実施。大正七年には市制を施行して、大垣市は誕生しました。その後、昭和三年北杭瀬村の一部を編入。以来、昭和四二年の赤坂町合併まで、相次いで市町村を編入し、現在の市域を確定しました。明治期の工業は、豊富な自噴水を利用した農産加工が主体でしたが、大正期に入ると繊維工業を中心に近代工業が発展。大正四年、揖斐川電力の操業開始により電力が揖斐川水系から供給されたことは、大垣市の工業化に画期的な役割を果たし、昭和初期には、化学・金属機械など重工業の比重が高まりました。太平洋戦争末期の戦火で多くの工場は焼失しましたが、戦後いち早く都市計画に基づき戦災復興事業が進められ、近代的な都市景観を出現させました。また赤坂地区では明治初年に金生山が開発されて以来、石灰工業、大理石加工業が発達し、その生産高は全国でもトップレベルです。平成元年四月には「水を愛し緑をほぐむ人間性豊かな産業文化都市」の実現に向かって第三次総合計画を開始。国際化・情報化・高齢化に対応した住みよい街づくりを目指して、多彩な事業を推進しています。

島市の桑原輪中まで。揖斐川を中心とした輪中地帯の大きな特徴です。

東西交通の要衝の地

約三億年前の大垣は海の底。木曾川、長良川、揖斐川などの堆積作用と、地殻変動によって陸地化が進み、約二億年前の古生代末期には、大垣市の地盤が誕生しました。北西部に位置する金生山は、この古生代石灰紀・二疊紀に属し、全山が石灰岩で成り立っており、数多くの化石を含んだ大理石の山としても有名です。

市域には弥生時代の遺跡も数多く散在し、早くから大和文化の影響を受けた西北部には、岐阜県下最大の前方後円墳である大塚古墳をはじめ、数多くの古墳が密集。東西交通の要衝であったことが伺われます。

奈良時代の律令国家の行政区分によれば、当市域は美濃国安八、不破、多芸の三郡に属し、壬申の乱のころ、安八郡に所在した大海人皇子の所領湯沐邑(日本書紀)は当市域にあったと推定され、法起寺式大伽藍の美濃国分寺もこの時期創建されたことが判明しています。

中世になると聖武天皇の施入によると伝えられる東大寺領大井荘をはじめ数多くの荘園が成立、平治の乱に破れた源義朝は尾張国へ落ち延びる途中、青墓宿(現在の青墓町)に逃れ、深手を負って絶命した次男朝長を円興寺に葬りました。

壬申の乱や源平合戦など、様々な合戦の舞台となった大垣市。それは杭瀬川の西にあった青墓が東山道の宿駅として、また平安末期から鎌倉期には鎌倉街道の宿駅として、東西を結ぶ交通の要衝であったため、様々な戦乱の舞台となったのでしよう。しかし鎌倉時代末期になると青墓宿は利用されなくなり、南北朝時代から室町時代には、争乱のため宿駅はいずれも衰退していきまし



美濃国分寺跡

## 郡奉行 伊藤伝右衛門 自害の顛末

揖斐川、牧田川の両川に囲まれた古宮。今村、浅草地区は洪水の常習地帯。悪水除去を目的に、天明三年(一七八三)、伏越樋の埋設工事は着工されました。その概要は牧田川と揖斐川が合流する横菅根地内の揖斐川の河床の下にトンネルを掘り、河道を作り、はるか下流で悪水を排水しようというもの。莫大な費用を投じて同五年三月に工事は完了しました。しかし同年五月には工事の責任者・伊藤伝右衛門が自邸にて自刃。この惨劇は伝右衛門の偉功を嫉む者が障害物を樋管に投じたため、悪水が停滞して伏越の効果があらわれず、引責自殺したものと伝えられています。後日、樋管を浚渫した時、意外にも障害物が発見され、これを除去したら水量はただちに減退。自殺の原因は未だ解明されてはいませんが、遺書によって推測すれば、公費である金七十両を幕府役人に調達し、「若し不成就の節は切腹と其節より覚悟」して着工。たまたまた天明四年の工事が成功しなかったのを機会に、彼の善意が非難的となり、翌五年の完成をみながら、「兼て覚悟の事故本望の至り」と自害。後年にいたり藩主氏教は伝右衛門の功績を追賞し、その業績は今なお高い評価を得ています。



# 水と緑のまちづくりを目指して

かつては大垣城の外堀であった水門川。この人工河川は舟運で栄えた大垣の大動脈として、また、輪中内に湛水する悪水を排出する水路として利用されてきました。毎年のように迫り来る大水や内水被害により、水門が築造され、幾度もの改修工事により現在の流路に定着。色とりどりの錦鯉が群れ泳ぐ水門川は、大垣の歴史と文化を見守り続けた貴重な財産です。この大切な財産を守り後世に伝えるために、修景事業が着々と進められ、美しい親水護岸などが総合的に整備されています。



水門川親水護岸(貴船橋～小原橋間)



川口水門普請絵図 岐阜県歴史資料館蔵



旧水門

## 時代の流れを水面に映す水門川

### ■水門川の開削

かつては大垣城の外堀であった水門川。この川は大垣より南流し、揖斐川に合流して伊勢湾に達する運河です。永禄四年(一五六二)大垣城主氏家直元が、斎藤龍興の命により城池改革の際に開削したと伝えられ、慶長十八年(一六四三)には城主石川忠総は現在の高橋川筋に改掘しています。水門川の運輸業はこの頃から始まり、元和六年(一六二二)杭瀬川から城下に開削されていよいよ発展、大垣に出入りするほとんどの貨物がこの水運に依存したため、港町船町が形成され、当河港は大いに繁栄しました。その一方、水門川の下流は揖斐川と合流するため、揖斐川洪水時は、逆水が大垣へ浸入。この被害を防ぐため、大垣藩主戸出氏鉄は寛永十三年(一六三六)にはじめて川口・外湖両村界に小規模の門樋を築造し、ついで承応二年(一六五三)六月には大規模の水門を竣工、水門川の名はここに由来しています。この水門は以後三十年毎に改造、水門番人として大垣藩士二名をおき、出水時には水門奉行が出張、水門川内に設けた広芝は、城下入水を防ぐ水の遊び場です。

### ■県営事業・水門川改修工事

従来大垣輪中の悪水排除は二系統に大別して行われていました。標高5m以上の輪中北部は水門川と同水系に属する支流川、輪中南部は揖斐川系統鶴森水路によるものでしたが、後者は明治改修によるものでした。伏越樋管を撤去し、※新設締切堤防の南部で水門川に合流、大垣輪中の悪水は三系統に大別して排水されることになりました。しかし、全輪中を通じて用水及び排水の根本的統一計画を実現するに至りませんでした。この矛盾を解決し、輪中内の用悪水系統

を根本的に整理するために県営事業として計画されたのが水門川の改修工事です。木曾川上流改修事務所は昭和五年から三カ年に渡り大垣輪中内の水位関係調査。その結果に基づいて用悪兼用の水路を整理し、用水と悪水は別々に水路を設けるなど、水門川の改修とともに用悪水路の改修を計画、同七年に着工しています。昭和三六年以降には、川口町から上流へ向かって曲がりくねった河道を整備する工事が行われ、現在は築捨町四丁目・国道二五八号線辺りまで完成。工事区間・河川延長約八・kmのうち約四kmが終了しています。こうした河川の改修工事は、当初計画を達成した後も、遊水池、田畑の埋立て、宅地造成、道路整備など、河川を取り巻く諸条件の変化により、ますますその必要性は高まるばかり。時代の要請に応えた河川改修は重要な課題となっています。※ここに新設水門と古宮悪水の開門が設置されています。

## 潤いのある都市空間創造を目指して 着々と進む 水門川環境整備事業

### ■美しい文化財を後世に伝えるために

大垣輪中の排水路として、水運を一手に司る川として、時代の流れを映しだしてきた水門川。しかし昭和に入り、舟運から鉄道や自動車へと主役の座を譲り渡すと、その役割も大きく変貌しました。中心市街地を流れ、色とりどりの錦鯉が群れ泳ぐ水門川。その川面を今も見守る住吉の燈台。この美しい風景は大垣にとともに歩み、発展してきた貴重な財産です。こうした水と緑を生かした独自の文化的資産を守り後世へ伝えるために、昭和四八年大垣市は「緑化推進条例」を制定。

潤いある水辺環境の創造を目指し、昭和五八年には国土庁の指定を受け「水緑都市モデル地区整備事業」をスタート。昭和六十年には建設省の「地方都市中心市街地活性化計画」のモデル都市認定を受け、大垣駅前沿線修景計画、水門川都市環境整備事業、大垣地区改良事業などが着々と進んでいます。

### ■水門川都市環境整備事業の概要

水門川を水都大垣の象徴的かつ中心的に位置づけながら、治水、親水機能を発揮させて、自然と調和を図り潤いのある生活のため同事業を計画、昭和六二年から着工し、現在も進行しています。

#### ▼水都タワー

水都大垣の自噴水の伝統的なイメージを基本に、未来への夢と希望に向かって高く湧き上がるスマートな形状と白銀に輝くステンレスの質感、ステンレスパネルには光ファイバーを設け、星空のまばたきと流星、銀河の星くすを演出、大垣の夜空を華麗にライトアップします。

#### ▼花と緑の続く遊歩道

松尾芭蕉の「奥の細道むすびの地」を起点に大垣駅東の愛宕神社までの総延長二・二kmの道を「水門川遊歩道・四季の路」とネーミング。花と緑のあふれる路の途中には「四季の広場」「貴船広場」などが点在し、貴船橋から新大橋までは「水門川プロムナード」として整備されています。

#### ▼親水護岸の創出

水都大垣の貴重な歴史的財産である水門川を優れた都市空間、親水空間として見直し、モザイク模様を配した親水護岸



貴船橋

四季の広場全景



新大橋

#### ▼四季の広場

「奥の細道むすびの地」や住吉燈台及び総合福祉会館などの周辺施設との連帯性を考え、自然の情景と歴史的景観を基調に、錦鯉の群れ泳ぐこの水辺空間を利用して、石垣、岩場、滝などによる水の辺、山の辺を表した「四季の広場」。水都大垣の新しい名所です。

#### ▼橋の高欄修景整備

大垣の歴史を見つめ続け、市民に親しまれてきた水門川の美しい水流を保ち、水都・大垣の魅力をより高めるために、錦町から船町までの水門川とその周辺に架かる橋の高欄修景整備を進めています。貴船橋には、大型の橋燈を設置した赤御影石の親柱に橋下を泳ぐ錦鯉が鑑賞できるバル

コニーを、駅前通りに架かる新大橋は、歩道幅員を拡幅し、上・下流の橋上広場に「太陽と風と緑」「みどりの風(はぐくみ)」と名づけたモニユメントを設置。周辺の景観との調和を考え、個性的にデザインされた橋によつて、街に新しい表情が生まれました。

#### ▼運河の高欄

緩やかな流れを保つ大垣運河(西水門川)に架かる月見橋、馬場橋、切石橋等には、橋の名にちなんだデザインが施され、夜景の美しさをより高める光ファイバーを取り入れた近代的な橋など、それぞれ工夫が凝らされています。

## 杭瀬川激甚災害対策 特別緊急整備事業



激甚災害対策特別緊急整備事業、通称激特とは、洪水高潮等により災害が発生した区域について、河川の改良事業を緊急に実施することにより、再度の災害防止を図り、国土の保全と民生の安定を目的としたものです。昭和五一年九月に西濃地区を襲った豪雨災害により、杭瀬川沿岸横曽根(国道二五八号線養老大橋、地内より浅西町までが、激特の対象地区となり、翌年建設省直轄事業として実施されています。

杭瀬川は相川、大谷川などを合わせ、牧田川に合流する流域面積一四九km<sup>2</sup>の河川で古くは揖斐川の本流であったといわれます。例年のように起きる澄水被害を解決するための河川改修が必要でした。その第一段階として、最も河道の狭い横曽根、浅西地区の川幅を広げるとともに堤防断面を大きくして、高水時でも十分耐えられる堤防を計画、大垣市全域の洪水時における外水位の低下を目指した抜本的な工事です。

現在では、この直上流に位置する近畿日本鉄道牧田川橋梁付近の流下能力が著しく低い、ため、堤防改修や橋梁改築工事が計画され、その事業が進められています。一方、杭瀬川の川岸には、杭瀬川スポーツ公園も計画され、水と緑おりなす美しい親水護岸を目指して、整備は進んでいます。



大垣運河(愛称・西水門川)馬場橋～月見橋間



### ● 十万石まつり

—10月10日—

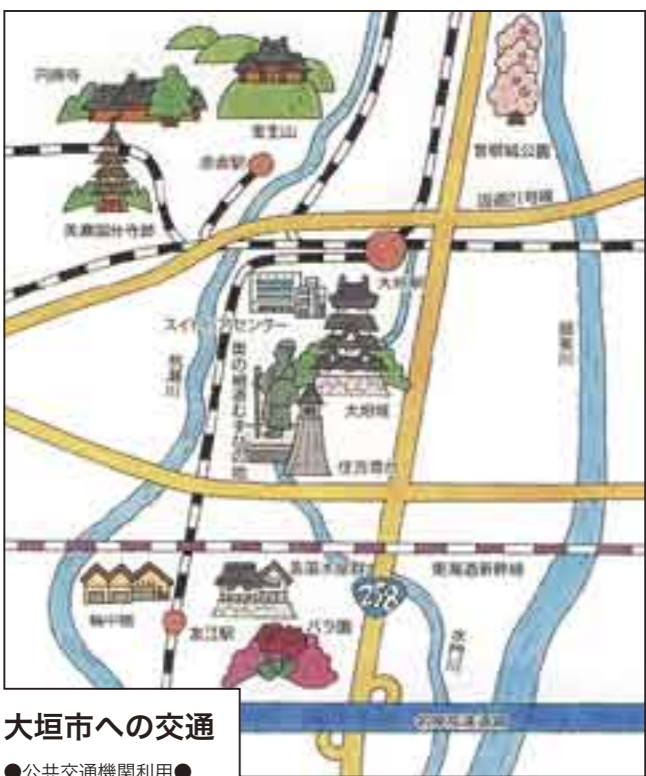
大垣藩十万石の歴代城主を祀る常葉神社の祭礼がはじまりで、神輿や餅まきのほか、大垣駅前通りでは40団体余の大パレード・マーチングバンドパレードや市民・企業総参加による100基のみこしが練り歩くなど、多彩な行事が繰り広げられます。



### ● 芭蕉蛤塚忌全国俳句大会

—10月23日—

大垣は「奥の細道のむすびの地」。河湊には蛤塚など芭蕉ゆかりの句碑が残されています。その大切な文化財を未来へ伝えるために、例年10月に全国俳句大会を実施。芭蕉没後300年にあたる本年度から「芭蕉蛤塚忌全国大会」と改め、芭蕉翁の頭頭をはじめ、記念講演、優秀作品の表彰式などを行います。

#### 大垣市への交通

- 公共交通機関利用 ●
  - ・ JR / 名古屋方面から東海道線で ..... 30分
  - ・ 岐阜方面から東海道線で ..... 10分
- マイカー利用 ●
  - ・ 名古屋I.C. → 名神高速を西へ50km → 大垣I.C. .... 約35分

## 気ままにJOURNEY

### ◆◆◆ 平治の乱で無念の死を遂げた源朝長の墓

JR大垣駅から西へおよそ五分。あくびをする間もなく美濃赤坂駅に到着します。赤坂は、古生代末期に誕生した金山山があるところ。金山が石灰岩からなり大理石も産出するこの山は、かつてゴルドラッシュユキながらに湧いた町。石灰製造業は今なお盛んで、大垣の代表的な産業の一つとなっています。その赤坂には、やはり歴史の面影を偲ぶ史跡があります。

時を遡ること八百有余年、紅軍と白軍が闘った平治の乱(二五九)のこと。闘いの苦渋を呑んだ源氏の総大将義朝は、長男悪源太義平、次男朝長、三男頼朝の主従八騎で東国へ逃れる途中、美濃源氏の拠点である青墓の大炊兼遠を訪ねて落ち延びてきました。というのも兼遠の娘延寿は義朝の寵愛を受けた側室で夜叉姫をもうけた

人。源氏再興を願って青墓まで逃げ延びましたが、不運にも朝長は都落ちの際、太腿に深手を負い、追手の手にかかるよりはと、ここ青墓で自刃して果てました。享年十六歳。その若いむくろは、円興寺境内に手厚く葬られ、今は父義朝、兄義平、妹夜叉姫とともに菩提を弔う五輪塔が当時のまま残されています。その一方、青墓に身を寄せ



源 朝長の墓

### ◆◆◆ 華やかなりし日を刻む 美濃国分寺跡

東海道線下りの踏切を渡り右へ道なりに辿っていくと、美濃国分寺跡があります。国分寺は奈良時代に聖武天皇の勅願で全国六六カ所に建立されたもの。名僧行基上人の勧めによって仏教に深く帰依し、信仰の厚かった光明皇后が聖武天皇に勧めたことからといわれています。その中でもここだけが唯一命をとりとめます。しかし当時十一歳の夜叉姫は悲惨な一族の顛末に絶え切れず、杭瀬川に投身して果てたとか。重ね重ねの悲劇の末に、頼朝は東国鎌倉にて開幕しますが、源氏一門をはじめ、ここを訪れる武士たちは、刀を解き墓人口の「刀石」の上に置いて詣りました。彼らが辿った道は、円興寺の裏コース。山々を燃えつくさんばかりの紅葉は、夜叉姫の、朝長の無念の想いを、問わずがたりに物語っているようです。

一、寺域全体が整備され、史跡保存されているもの。当時の寺域はおよそ二町四方(4ha)にも及び、南大門、中門、金堂、廻廊、七重塔、鐘楼、経蔵、僧房等のいわゆる七堂伽藍のある荘厳なもので、国府に隣接して僧寺と尼寺が揃っていたといわれています。奈良時代に造営された国分寺も律令国家の衰退とともに、権威と機を失い、今では地名に名残をどめる程度。どんな権力も、名声も、時代の波の前には、朽ち果てていくのでしょうか。

秋の太陽は、実りの時を迎えた稲田にも、国分寺跡にも惜しむことなく平等に、柔らかな光りを降り注いでいました。

美濃国分寺跡



# 美しき川の流れば、歳月を越えて悠々と。大垣は、今、水の秋。

住吉の川燈台を過ぎると、過ぎ行く季節を惜しむかのように、桜の梢が川風に揺れていた。水面は茜色の鱗雲を浮かべ、水と空を染めつくす秋の夕暮れ。川端にぼつんとたたずむ常夜燈は、何を照らし出しているのであろうか。かつて、芭蕉が歩いた道を、美しい夕日が染めあげていく。

### ◆◆◆ 大垣城に伝わる おあむの伝説

時代を遡ること三百有余年、慶長五年秋。天下分け目といわれた関ヶ原の合戦は、わずか一日にして東軍に勝利をもたらしましたが、西軍の最後の砦といべき大垣城では翌日も激しい攻防が繰り広げられていました。その大垣城に父や母とともにたてこもったのが当時十六歳であった「おあむ」。東軍に包囲された大垣城でおあむは鉄砲の玉づくりに精を出し、討ち取った敵軍の「首」に死化粧を施していました。当時、戦場で死に絶えるのが男の美字なら、討ち取った武将に首化粧をして、その手柄に花を添えるのが、城を守る女たちの愛情。血や泥を拭きとってお歯黒をつけると、雑兵の首も侍大将の首に様変わりしたという。

しかし戦況は悪くなる一方。いよいよ明日日が落城というその日、おあむの父は脱出を決意。天守閣から西北隅の松の枝をつたって内堀におり、たらい舟で落ち延びまし

### ◆◆◆ 歴史の舟歌が聞こえる

十万石の城下町として栄えた大垣は、いたるところから小さな噴水のような水が湧き出でていたという水の都。その名にふさわしく、季節が歴史の舞台を染め上げていく。春には桜、夏には深緑、秋には紅葉……。かつて船人が行き交った川岸に一人たつとめば、聞こえてくるのは歴史の舟歌。夕暮れに染まる城下町を月日という旅人が行き交う。

名神高速で名古屋から京都へ向かうとおよそ三五分。稀にみる水飢饉の影響か、眼下に望む木曾、長良、揖斐の三川はこのほか頼りなげで、ところどころに土色の中州が見えています。これも自然が人類に発する警鐘なのでしょう。水の、自然の、有り難さ。大切さを、いまさらながら実感した今年の夏。そんな季節は今ゆつくりと衣替え。優しい秋の太陽と、高く透きとおるような青空が、旅人を出迎えてくれました。

### ◆◆◆ 奥の細道むすびの地

水門川を泳ぎ回る錦鯉の数はおよそ五万匹。橋の上から餌を投げれば、美しい鯉が多く集まってきました。この鯉は水門川の水質を管理するために放流されたもの。跳ねあがりばかりに鯉が元気なら、水門川は清流であり、病が発生し死に絶えるのなら、汚染が進んでいるという、いわば水門川のパロメーター。そんなことを知ってか知らずか、水飢饉を跳ねかえすほどの勢いで、餌をねだっているようです。鯉が群れ泳ぐ水門川に架かる橋は二四。その橋を数えながら下っていくと、



おあむの松伝説を綴った絵巻物



奥の細道むすびの地



特集

# 明治改修

第一編

## 官民熱望の末、三川分流を 目指した明治改修、 いよいよ始動。

太平の眠りから覚めた日本。

富国強兵策のもと近代化を急ぐ明治政府にとって、  
河川改修は、解決せねばならない課題。

官民双方からの強い熱望に応え、

ついに明治改修を実施することになる。

オランダ人技術者を招聘し、

明治二〇年から二五年の歳月を費やして、  
悲願であった三川分流は実現されることになる。

明治改修の道のりを六回に渡って特集し

その背景や、工法、蘭人工師デレーケの素顔など、

明治改修の全貌を浮き彫りにします。

### ● 維新期を迎え、 多発化する洪水禍

近世史上稀に見る難工事であった宝暦  
治水以降も、濃尾平野下流域は頻々と洪  
水を蒙り、とりわけ美濃の低平地におい  
て正常な収穫を得るのは「三年に一度あ  
るいは五年に一度」という悲惨な状態のま  
ま、明治維新を迎えることとなりました。

幕藩体制の崩壊後、中央集権化を急ぐ  
明治政府の混迷も、この惨状に拍車をか  
ける大きな要因となっております。という  
も、この混乱期、幕府や諸藩、新政府は  
山林を監視するゆとりすらなく、新秩序  
の構築を前に、昔からの掟や慣習は反古



江戸期の複雑な支配機構は、それゆえ  
に、三川分流という総体的あるいは抜本  
的な解決方法を見出すことができません  
でしたが、少なくとも無秩序な築堤を禁



木曾川・長良川の背割堤、およびケレップ水制群写真集「空から見る木曾三川下流」より

になりがち。維新後も生活苦にあえぐ農  
民たちは、勝手に山林を伐採し、薪を採  
り、炭を焼くという、いわば無法状態に  
陥り、江戸期に徹底された山林の規制は  
崩壊、無用の乱獲が下流域の洪水につな  
がっていったことは、いままでもありませ  
ん。  
この状況は輪中地帯でも同様です。慶  
長十四年（一六〇九）の御囲堤築造後、  
「美濃は尾張より三尺低くあるべし」の  
不文律はもろくも崩れ去り、各輪中は競  
つて堤防を高くし、自らの利権を守るこ  
とだけに終始したのでした。

止あるいは規制することによって、洪水禍  
を最小限にとどめていたのでしょう。  
幕藩体制崩壊後の富国強兵策のもと、  
近代化を急ぐ明治政府にとって、河川事  
業もまた、解決せねばならぬ重要な課題  
でもありました。

### ● 官・民双方から湧き上がる 治水への熱望

この時期、輪中地帯では、新しい組織  
体制と、新しい技術による河川改修を要望  
する声が高まっています。大垣藩医をつと  
め、蘭学塾を開いていた江馬活堂は明治元  
年、政府の治河局設置を知って、次のよう  
な建言をしています。「…今皇政普施し既に  
治河局ヲ開カセラレ河ノ水道ヲ疎冷（ひ  
らきあるろ）セラルト承ル、治河ノ民  
聖恩ヲ蒙ル無窮ナリ、然レドモ未タ天下二  
及バサルベキヲ聞ズ、願クバ皇國中ニ及ボ  
サレ大河小川トナク尽ク之ヲ疎冷セラレバ  
水害ヲチドコロニ減ゼン、豈下民ノ幸福  
ノミナラス実ニ天下ノ美事ナリ…」

しかし、その予算は膨大になる筈だから、  
国債をもって治水の費用にあてるべきだ、と  
したのでした。

同年、笠松県（岐阜）知事長谷部忠清は「水  
利論」を著し、その中で「水利ノ儀は畢竟  
海口ノ壅塞（ふさぎさせざる）ヲ疎決スル  
コト、河道ノ水勢ヲ分脈スルトノ二ツ可有  
之…」と、分流の必要を説いています。

翌一年、笠松県管轄下にあった伊勢・  
桑名郡のうち四五ヶ村が渡会県（三重）へ  
所轄変更になった際、笠松県は「木曾三川  
の川筋にあたる村々は、川普請の關係から  
も、ぜひ同一管内におくことが必要」と、  
政府に要望、いち早く「分流論」や「流域  
行政二元化」が登場していることから、  
治水への関心の高さ、期待の大きさを、伺  
うことができます。

明治四年、名古屋大参事丹羽賢は「外  
国人を使って従来と二変した体制で工事に当  
たれ」と要望する一方で、  
「…平生堤防没流ノ事二尽力スルモ、諸

県境界ヲ接シ犬牙交錯、勢ヒ分レテカ専ナ  
ラス、終ニ大土工ヲ起スヲ得ズ、徒ニ全力  
ヲ費シテ依然其害ヲ受ク」「…官吏出張、  
予防ノ策ナキニ非ザレドモ、或ハ好民口ニ  
利スル陋習（悪い習慣）アリテ活潑ノ開キ大  
工事ヲ起ス能ハズ、此ヲ以テ水利ニ熟スル  
外人ヲ雇入レ、治河必要ノ器械ヲ購入シ  
浚疎ノ大土工ヲ起コサバ、積年ノ大ヲ一朝ニ  
ニ除キ傍水ノ村落安堵スヘク…」  
「好民」という言葉は明治の官僚意識を  
露骨に示していますが、そのころの輪中住  
民の利己的自衛手段には、ほとんど手を焼  
いたのでしょう。大参事である丹羽も、流  
域全体を統括する河川工事の必要を痛感し  
た、一人でありました。

明治十年には、渡会・愛知の両県は新  
政府に、木曾三川改修について、その費用  
の問題も含めた治水の方策を、流域内での  
利害に關係する県が協議して探すべきだと  
し、新政府の水利工師により、治水の指示  
を受けた、と願っています。こうした官・  
民双方からの治水への強い要望と働きかけ  
は、新政府がオランダ人工師ヨハネス・デ  
レーケを木曾川改修調査に派遣することを  
決定させ、後の明治改修にあつての大き  
な原動力となっております。

### ● オランダ人工師の招聘

鎖国以来二百数十年、日本と特別な  
關係を保つてきたオランダは、世界の文  
明、文物、情  
報を伝えてきた  
ところ。幕末に  
は幕府の留學  
生を受け入れ、  
「ヤパン」（後  
の威臨丸）など  
の軍艦を建造、  
回航し、長崎の  
伝習所にオラン  
ダ海軍士官を派  
遣して、日本の  
近代化をバック  
アップしてきま  
した。しかし運  
命とは皮肉なも  
の。欧米列強の中にあつて、オランダの  
際社会に占める地位は低下し、「オランダ  
の世紀」とまでいわれた、十七世紀の権  
威と繁栄は失われていたのです。従つて新  
国家建設を目指す明治政府は、英・仏の  
技術者、専門家を招聘、オランダはも  
はや主流から除かれていたのです。こうし  
た中でただ一つ、土木技術の分野にはオラ  
ンダ人技術者を登用。国土の相当部分が  
海面下にあるオランダの河川、港湾技術  
は、他の列強に卓越していたのでし  
ょう。当時の官僚木戸孝允の批判はあつたもの



明治改修計画図 (木曾・長良・揖斐三大河水利分流改修計路全図) 『輪中と治水』より

そして明治五年、新政府がオランダ人技  
術者を招聘して（決定は明治三年）、治水  
についての調査に着手すると、各輪中の取締  
役が三川分流工事の実施を土木司に上申。  
個人資産をはたいて、分流工事推進に奔走  
する篤志家も出現しています。  
この人物は安八郡土倉村（岐阜県海津郡  
平田町土倉）の浄雲寺住職・高橋示証。三  
川の幅員を拡張するとともに、河口までの  
分流の必要性を願い出、同八年三月、六月  
の二度に渡つて、治水之儀について建言を行  
つています。



来日の頃のデレーケ



木曾川右岸の水制工

木曾川信濃  
川について  
も重点的に  
河川改修の  
調査と計画  
立案を進め  
ました。彼  
らのうちで  
木曾三川と  
切つても切  
れない宿命  
的な關係が  
できたのは、  
四等工師ヨハネス・デレー  
ケ。淀川水系でデレーケらによつて試みら  
れた工法の成果は政府に報告され、羽根  
から各地に通達されて、養老山系の羽根  
谷、般若谷（いずれも岐阜県海津郡南濃  
町）に石積みみの砂防堰堤が築かれ、海西  
郡成戸村（海津郡海津町）で水制工事が  
着手されるなど、その一部は木曾川水系  
でも実施に移されました。  
こうしてデレーケらは、明治政府より  
木曾川改修調査を命ぜられ、明治十一年  
二月二三日から三月六日にかけて木曾川  
水系を視察、三川分流を目指した明治改  
修は、いよいよその第一歩を踏み出したの  
でした。

### 明治改修のあらまし

明治政府は西欧の近代技術を導入  
し、抜本的な改修、すなわち完全な三  
川分流計画を策定し、蘭人工師ヨハネ  
ス・デレーケの監修のもと、明治20年  
に着工しています。その目的は①洪水  
防御②堤内の排水改良③舟運路の改善  
であり、そのうち①と②が重点課題。  
高水工法を主体に第一期から第四期に  
かけて工事は行われ、明治45年には完  
成、三川分流を実現しています。



デレーケによる改修図 木曾川下流工事事務所所蔵

### 参考文献

- 『木曾三川とその流域と河川技術』  
建設省中部地方建設局 一九八八年
- 『水の文化情報誌 FRONT』  
一九九二年 九月
- 『デレーケとその生涯』  
建設省中部地方建設局 一九八七年



# 全財産をなげうち

## 治水治山に尽くした金森吉次郎

毎年のように迫り来る洪水禍、内水被害…。そんな災害を根絶するために、生涯を賭して奔走した人がいます。幕末に生まれ、明治、大正という激動の時代、治水治水に尽力した金森吉次郎がその人です。抜本的な解決を目指した明治改修の請願活動はもちろん、宝暦治水の顕彰活動まで、その功労は今もなお、高く評価されています。そんな金森吉次郎の生涯を、大垣市立興文中学校校長であり、郷土史研究家の清水進先生に語って頂きました。

清水 進氏プロフィール

大垣市立興文中学校  
岐阜県立興文中学校  
岐阜史学会員、新修垂井町史編集委員、岐阜県内の小・中学校の他、岐阜県史編集委員、岐阜市史編集委員、岐阜県教育委員会指導主事、岐阜県文化課文化財係長、大垣市学校教育課長などを歴任。この間、岐阜県内の垂井町史、真正町史、安八町史、各務原市史、可児市史、ふるさと笠松、文教のまち大垣、大垣のあゆみ、西濃ゆかりの女性群像、わたしたちの岐阜県の歴史、郷土に輝く先人などを執筆。県史編集委員では古代中世の古文書分野を担当、岐阜県史に関する著書、論文多数。



■金原明善の生き方に感銘  
吉次郎は金森金四郎の二男として、元治元年（一八六四）十一月二九日、大垣魚屋町で生まれました。祖父の嘉兵衛は商人でしたが学問を好み、頼山陽、梁川星巖、貫名海屋らと交際し、漢詩の結社である大垣の白鶴社の同人として活躍しました。家の仕事より天下国家を論ずる人でしたから家業が急速に衰えていったことはいうまでもありません。そのため父金四郎は家業の建て直しに努め、茶の外国貿易や製糸業を手がけて巨万の富みを得、大垣屈指の財産家となりました。

■治水のとは治山にあり  
明治二四年十月二八日、根尾谷を震源地とする濃尾大震災が起きました。吉次郎はこの震災では母を亡くしましたが、悲しみにくれる間もなく、災害復旧のため懸命に働きました。県会議員であった吉次郎は被害状況を電報で政府に報告することも、岐阜市の第十六国立銀行の金庫にあつた貨幣の溶けた塊と大垣別院の梵鐘の溶けた龍頭を持って上京し、政府当局や宮内大臣等に陳情活動をするなど、復旧のため尽力しました。



根尾谷の視察 後列左から3人目 金森吉次郎、6人目 山田省三郎 前列左端 金原明善

濃尾大震災は河川や耕地、家屋だけでなく、山林に大きな被害をもたらしました。吉次郎は金原明善や山田省三郎らと揖斐川、長良川の水源地帯を見廻り、崩壊の状況を写真撮影して政府に送り、治山対策の必要性を訴えました。この結果、明治三二年度より森林法が施行され、県下の公私有林の総面積の約一割、五万二千町歩に苗木一億八千万本を植樹することになり、植林奨励費も継続して支出されることになりました。

岐阜県ではこれまで西南濃の水場地域と飛騨・東濃の山岳地帯が土木費の配分をめぐって対立してきました。県会でも水場派

吉次郎は好学の気風をもつ祖父、先見性と商才にすぐれた父の才能を受け継ぎ、恵まれた環境の中で育ちました。学制頒布により明治七年（一八七四）、十歳で興文小学校に入学し、よく勉学に励みました。



金原 明善

明治十一年十二月、吉次郎十四歳のときのことです。たまたま郵便報知新聞を読んで「天龍川に堤防を築き、治山治水のために私財をなげうつてまで国土を愛し人々を救う」という静岡県の金原明善の記事に深い感動を覚えました。毎年のように水害に苦しんでいる大垣の人々を救いたいと願っていた少年吉次郎にとって、明善の生き方は将来の指針として心の中に深く刻み込まれたのでした。

### ■治水のための努力

西濃地方は水害を蒙ることが多く、特に明治十五年から二十年の七年間に四回も大洪水が襲来し、家屋、田畑が大きな被害を受けました。中でも明治二二年七月二九日の暴風雨は、揖斐川とその支流の堤防五二カ所を潰壊させ、死者は五三人に及び、大垣輪中は泥海と化し、東海道路以南は収穫皆無であったとい



大垣城に建てられた金森吉次郎の銅像

います。このとき吉次郎は二四歳の若さでしたが、推薦されて救済委員となり、上京

によるものでした。吉次郎は明治三二年に安八郡会議員、翌三三年には衆議院議員にも選ばれ、国政の場でも治山治水のため存分に活躍することになります。木曾三川分流工事は明治四五年に完成しますが、吉次郎は引き続き上流改修工事のために尽力しました。また、植林の重要性を訴え、明治三〇年、揖斐川上流の村々へ寄贈した杉苗三〇万本をはじめ、全国各地へ生涯を通じて苗木を寄贈し続けました。

吉次郎は治水功労者の顕彰にも努めました。桑名の海蔵寺で薩摩義士追弔法会を行い、薩摩義士の功績を世に広めました。この努力が宝暦治水碑や治水神社の



宝暦治水碑（油島千本松）

建設に結びつきます。吉次郎は昭和五年十月十三日に六六歳の生涯を閉じます。子どもがなく、豊かであった私財もすべて治山治水に費し、死後、家も売りに出されました。生涯を郷土のために捧げることになりましたが、この吉次郎の功績を永久に讃える銅像が大垣公園に建てられ、豊かに実るふるさとの穀倉地帯を見守っています。



天守閣石垣下部洪水点標柱

■堤防を切り割る  
明治二九年七月、西濃地方を大洪水が襲いました。降り続く豪雨によって各河川が氾濫し、民家は屋根まで浸水し、大垣城天守閣の石垣にまで水が達しました。大垣輪中に流れこんだ水を引かせるには、輪中の下の堤防を切るしか方法がありません。しかし、安八郡役所の許可は出ません。激しい風雨の中で、もう一刻も猶予できないと判断した吉次郎は、一命を捨てる覚悟で集まっていた村人に命じ、横曽根の堤防を切り割りました。この吉次郎の決断のおかげで、輪中内の濁水は一挙に揖斐川へ流れ出し、八千戸の家と四万人の命を救うことができました。

このとき大垣輪中堤防委員長であった吉次郎を決断させたのは、「横曽根権現下切割の事」について、父金四郎の「余老たり、今後一朝堤防破壊入水ノ難二遭ハハ、爾一死以テ事二当リ決行セヨ」という遺言

## BOOK LAND

### 西濃ゆかりの女性群像

編集…スィンク推進協議会  
発行…スィンク89西濃事業推進本部



中山道をはじめ美濃路・伊勢路・巡見街道など主要道路が古くから発達し、東西の文化と経済の要衝の地として栄えてきた西濃地方は、長い歴史の中で優れた文化や人材を輩出しています。その中でも女性の果たした役割は極めて大きく、徳川家光の乳母として江戸城大奥で一世を風靡した春日局、第十代大垣藩主の正室大栄院、雑誌「青柳」で活躍した上田吉み・上野葉子など、幾多の女性がそれぞれの時代に活躍し足跡を残しています。そんな女性の生きざまを著した本書は、その業績と人柄を偲ぶことができる貴重な一冊。各時代を生き抜いた女性の素顔が親しみやすい文章で綴られています。



# 民話の小箱

## 石引神社と 大垣神社の長刀岩

—大垣市赤坂—

今からおよそ二六〇年前のこと。  
寛永年間（一六三三—一六三九）の出来事です。

時の城主松平定綱は大垣城を修築しようと、  
沢山の石垣石を赤坂北之端にある金生山から切り出しました。  
しかし、車も鉄道もない時代のこと。

1m以上の石を城まで運ぶのは、一苦労。

人々は知恵をしばつて、田んぼに青竹を敷きつめて竹の道を作り、  
大勢の人夫を狩りだし、大きな石をゴロゴロ転がして、杭瀬川を経て、城内へ運びました。

ここからは筏を組んで、船町川から外堀の水門川を経て、城内へ運びました。  
お殿様は立派な石垣が出来上がっていくのをお喜び、  
毎日毎日、工事を見守っていました。

ところがある日のこと。

たいそう大きな石がどうしても動きません。

人夫たちはみんな困り果てていたところ、お殿様は大変お怒りになり、  
「ここは若者はおらぬか！」と怒鳴り散らし、

自ら長刀を払って、人夫たちを叱咤激励されました。  
若者たち勢ぞろいして一生懸命力を合わせたところ、

さすがに大きな石も無事運ぶことができ、  
立派な石垣ができあがりました。

お殿様はたいそう喜びようで上機嫌のあまり、幕府へ願い出て、  
当時幕府領であった赤坂宿を大垣領に組み替えてもらいましたが、  
桑名にお処替え（転任）になりました。

これを残念に思われた殿様は、桑名へ転任後、  
桑名祭りを石取り祭りとされて、大垣を偲ぶ記念にされたということです。

また、それ以来、赤坂権現宮の名を石引神社と改称し、  
大垣城内の巨石を「長刀岩」と呼ぶようになりました。

石を運んだ船町通りでは、工事を記念して、石車を形どり、  
大垣祭りの山車にしたといわれています。



## ● 木曾川文庫利用案内 ●



- 《開館時間》 午前9時～午後4時30分
- 《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》 無料
- 《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分  
名神羽島ICから車で約30分  
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》  
船頭平閘門管理所・  
木曾川文庫  
〒496 愛知県海部郡  
立田村福原  
TEL (0567) 24-6233



## 編集後記

明治改修の軌跡を今に伝える船頭平閘門が、平成6年7月に改修されました。近年でも年間400～500隻の漁船が利用する閘門は、いわば日本のミニパナマ。平成の改修工事ではその機能を強化し、スロープや階段護岸、管理橋など、環境も整備されました。ご家族でお友達同士で、生まれかわった船頭平河川公園へ出かけてみませんか。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曾川文庫まで。

Vol.12編集にあたっては、大垣市役所、大垣市立興文中学校長の清水進先生にご協力をいただき、ありがとうございます。

今回は恵那市を特集します。ご期待ください。

（表紙写真上：住吉燈台 下左：大垣城 下右：水都タワー）